

# シ チ ェ ド リ ン 雑 考

(《За рубежом》のアレゴリーをめぐる)

相 馬 守 胤

ロシア文学に諷刺的描写が初めて明確に、かつ広範に現われたのは、主として民話の形をとった17世紀末頃の口碑文学と、翻訳ものの滑稽小説あたりからと見られている。その後 A. C. Грибоедов, Н. В. Гоголь 等の巨匠を経て、現代ソビエトにも辛うじて続いている諷刺精神の流れの中で、Михаил Евграфович Салтыков-Щедрин (1826~1889) が執筆活動をした19世紀40年代~80年代には、封建的農奴制がゆらぎ、産業資本主義の萌芽が生じ、一方言論抑圧は歴史上その例を見ないほど苛烈を極めた。殊に60年代、70年代に行なわれた革命的社會運動が崩壊し、自由主義的改革運動へと変質し、ブルジョアの諸要素が次第に強化されつつあった時代において、ますます堅固の度を加える検閲の障壁を克服しながら、当時のロシアの不条理な世界を描出し、不当な権力と愚行を毒々しく笑う手段としてシチェドリンに残された唯一の方法は、極めて特殊な欺瞞的表現法、いわゆる эзопов язык、あるいは彼が рабья манера と言いかえた表現の技術であった。不幸にしてねじ曲げられ、枷をはめられた不自由な舌が、検閲機関の背後にいる読者に向って、やむを得ず不自然な表現方法で綴る言葉はまさに「奴隷の言葉」であり、その行間を読みとる読者の態度は「奴隷の態度」でなければならなかった。

しかしこの忌わしい環境は、知力を尽してこれに抵抗しようとする知恵をますます磨き上げ、И. С. Тургенев をして「同時代人の誰よりもよく自国を知っている」と驚嘆せしめ、М. Горький をして「シチェドリンの助力なしに19世紀後半のロシア史は理解できない」<sup>(1)</sup> と云わしめたシチェドリン文学が、彼の非凡な才能と、彼が生きたロシア社会の後進的特異性によって成立したことは、ロシア文学史上特に注目すべき現象であり、シチェドリン文学の今日的意義を再考する価値もそこにあるかと思われる。

ところで、これらシチェドリンの作品群を死後80年以上も経過したいま、かつては作者と読者が謎解きの鍵を共有し、相互に理解し得た行間の意味が極めて難解になっている事実に驚く。それどころか、当時においてすでに批評家 П. К. Щербальский は次のように述べている。

„Трудно понимать г. Щедрина, и это не потому, чтоб он плохо владел русским языком; (略) Но он отбросил обыкновенный русский язык и стал писать на «рабьем языке». (略) Слова в нем русские, но имеют вовсе не то значение, какое им присвоено в словаре Академии или Даля. (略) чтобы понимать язык г. Щедрина и его последователей, надо понимать подмигивания.”<sup>(2)</sup>

アカデミヤ版やダーリの辞典では当然察知し得ない《подмигивания》が当時の批評家をも悩ませた消息を語る一文である。

また、かつて Л. Н. Толстой は、文学作品を評価する尺度として、外国語に翻訳された作品の量を挙げ、《Щедрина пробовали переводить — ничего не выходит. Иностранный

читатель читает и ничего не понимает》<sup>(3)</sup>と述べているが、これはシチェドリンの作品が外国語にあまり翻訳されていないという事実に基づく結論とは思えず、むしろ一般的評価から受けた印象と解すべきであろう。

これに対して С. В. Ковалевская は「フランス語には沢山翻訳されているが、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキーのように理解されてはいなかった」と述べ、自国ではこれほど高く評価されている作家に対する外国人たちの冷淡さの原因を次の二点に要約している。

1. «родная почва» とあまりにも密接な作品のジャンルそのもの。
2. ツアーリの検閲下で用いざるを得なかった «эзоповский язык»。<sup>(4)</sup>

シチェドリン文学をはぐくんだ当時のロシアの現実には、歴史的発展過程において極めて特異なものであり、時間と空間をへだてること遠い外国の土壌において、上記二点の条件を負った彼の作品を理解することは明らかに困難である。しかも、公的に十分な根拠を固めて発禁措置をとる政府の検閲官のほかに、読者の中にもいた、より有害で危険な «цензоры-добровольцы»<sup>(5)</sup> の監視の目をも絶えず意識しつつ執筆せざるを得なかった状況下で、美学的、倫理的感覚を、常に秘められた意味において暗示する天才的な表現手段を生み出した事実を考えれば、前掲のコワレフスカヤの分析は当を得たもので、「外国人の冷淡さ」の原因はそのまま難解さの主因ともみなし得る。

比喩、示唆、断絶法等を広範に駆使し、個々の語句さえしばしば二重の意味をもつ隠喩的言語に加え、社会各層にわたる種々の「方言」等のほか、他のいかなる作家にも追従を許さぬほど知悉した、彼の独壇場とも云える官庁用語を効果的に縦横に使いこなすことによって、喜劇性を帯びた攻撃用武器としただけではなく、検閲の首枷を巧妙に回避し、慎重な防御、掩蔽策に用いている。

この諷刺的アレゴリーの殻の中に秘められている真意を軽視したならば、作者が周到に意図したプロットも、作品全体を通して作者が計算した諷刺的効果も滅殺され、或は歪曲されることは避けられない。また、この殻を破るには、読者の側にしかるべき予備知識が用意されており、しかもその上作者に対する共感的心情がなければならぬ。

たとえ不十分な条件下にあっても、この二点を克服すべく何等かの試みをなすことこそがシチェドリン文学を理解するための手がかりになるものと見て、作中に頻出する種々の独創的語彙、語法のうち、特に人名が意味する諷刺的アレゴリーを二三例抄出してみたい。

シチェドリンは二度目の外国滞在中、1880年に、主としてビスマルクのドイツとパリ・コンミュン挫折後のフランスに滞在しているとき、作品《За рубежом》の筆を起し、1881年単行本として出版した。<sup>(6)</sup> 当時は憲兵、警察、検閲による弾圧が一時若干軟化したかに見えたのが、アレクサンドルⅡ世暗殺事件後再び猛威をふるっていた。一方において労働運動は激化し、マルクイズムが浸透しつつあり、他方においてインテリの間では政治から遊離した純文化啓蒙事業、道徳的自己完成、トルストイ主義等が流行していた。検閲の煤煙を貫いて閃光を輝かしめ、それ故にこそ滅亡しなければならなかった<sup>(7)</sup>《Отечественные записки》が発行停止の処分を受け、Н. А. Некрасовの死後、同紙の編集長となっていたシチェドリンが《Негде писать, совсем негде...》と嘆息した1884年に先立つ三年ほど前のことである。この作品は、「先進的」西欧の社会、政治、文化、風俗をロシア的、民族的視点に立って、「後進的」ロ

シアの現実との関連において掘下げた名著の一つである。ここに使用されている数多くのアレゴリーの中、一見不可思議な人名、あるいは或る種の間人集団のアレゴリー、就中 *русские культурные люди за границей* に焦点を当ててみよう。

### 1. Твёрдоонто (бонапартист)

これはシチェドリンの作品にしばしば登場する *республиканцы, помпадур* 等と同様に、象徴化された否定的人間像の一種、*бонапартист* の一人として描かれている。

*Бонапартист* とは、字義どおりとれば「ナポレオン三世の帝政復興論者。ボナパルト主義者」であり、各種辞典に解説されているところであるが、ここでは特に1873年から1877年にかけてのフランス共和国危機の際に主役を演じてナポレオン三世を擁護したボナパルト主義者や、彼らと或る意味で類似の行動を示した或る種のロシア人たちにこの用語を用いているようである。

つぎに、作品に散見される用例を検討しながら、まずシチェドリンが伝えようとした *бонапартист* 及びその女性形 *бонапартистка* の意味とその周辺をさぐりながら *Твёрдоонто* の人間像を観察してみよう。

„Если даже ему, истомленному человеку тягла, надо «честь знать»,<sup>(8)</sup> то что же сказать о празднолюбце, о бонапартисте, у которого ни назади, ни впереди нет ничего, кроме умственного и нравственного декольте?» (Щ. XIV, 10)<sup>(9)</sup>

(下線は引用者。以下同様)

作品の冒頭で三項目にわたってあげた *культ самосохранения* に関する叙述の一部であるが、ここでは *празднолюбец* と同格に扱われており、さらに *«празднолюбец, который самовластно директирует, что для кого-то и для чего-то нужно, чтобы почки действовали у них в исправности!»* (Щ. XIV, 10) という説明が付けられている。即ち、土地と労働に釘づけにされ、外国の湯治場で保養する暇など勿論なく、賦役で疲労困憊している者でさえ *«надо честь знать»* としたら、勝手気儘に布告を発したり、保養地でゆうゆうと気晴らしをしている一握りの *празднолюбец* の生態に、作者は痛憤を覚えずにはおれないのである。

なお、このボナパルチストという用語については、作品の前置きの結びで、字義どおりには受けとらぬようにと、次のように具体的な鍵が提供されている。

„Под «бонапартистом» я разумею вообще всякого, кто смешивает выражение: «отечество» с выражением: «ваше превосходительство» и даже отдает предпочтение последнему перед первым.» (Щ. XIV, 11)

この他に *«юный бонапартист»*, которому только безмерное безрассудство до сих пор мешало обдумать, в чью пользу и за какую сумму ему придется продать «отечество» (Щ. XIV, 62), および次の引用文中の *«родина»* を *«отечество»* に置き換えて検討すれば、ボナパルチストの祖国観と *Твёрдоонто* との関係が若干浮かび上がってくる。

„Разумеется, я не говорю здесь о графе Твёрдоонто, который едва ли даже понимает значение слова «родина», но средний русский «скитарец»<sup>(10)</sup> не только страстно любит Россию, а положительно носит ее с собою везде, куда бы ни забросила его капризом судьба.» (Щ. XIV, 165)

苛酷な運命の戯れによって祖国を追われ、自らの思想と習慣、配慮と関心の重荷をひきずり歩くロシア人を含め、彼らの切々たる祖国愛と、「родина」の何たるかも解さぬ Твёрдоонтоとの対比がなされている。

Бонапартист は時には бонапартистка と並置され、さらには дамочка, кокотка とまで同格に置かれ、「Пишу не для дамочек и не для бонапартистов, а для тех, кои, сидя на берегах Лопани, Вороны и Хопра, не ослабляючи вздыхают над вопросами об акклиматизации саранчи...» (Щ. XIV, 10~11) と、作者の脳裡を一刻も離れぬ祖国の大衆と対置している。因みにこの頃、ロシア南部諸県や中部黒土地帯が早ばつの上、いなご等の虫害が拡がり、社会不安が農村から都市部にも波及したが、当局はこれに対して無為無策であったことを痛烈に糾弾している。

Дамочка の描写では、「пустоголовая, но хорошо выкормленная бонапартистка» (Щ. XIV, 62) とか、「культурно-интернациональные дамочки, кокотки, бонапартистки...» (Щ. XIV, 7) といった表現を用いることもあり、湯治場ではデコルテをつけ、上半身と襟首だけを清潔に保ち、男性の視線を浴びるべく浮き身をやつす手あいを指し、全く考慮に働かない代物として触れながらも、「Самая плохая дамочка, если бог наградила ее хоть какую-нибудь частью тела, на который без ожесточения может остановиться взор мужчины...» (Щ. XIV, 8) と、彼女らが Краеншен を飲用する際の意識的なポーズを、作者は素速く見てとっている。彼女らの кокотка 振りは病脊背に入り、若いボナパルチストの巧言にももはや血が湧かず、「Как истинная кокотка по духу, она даже этим не волнуется...» (Щ. XIV, 66) (二重下線部分は原文でイタリック体) と、この引用文の前後を含め、まさにスウィフトの「淑女の化粧室」の描写に迫るものがある。

また、夜ともなれば «гостиницы и въезжие дома наполняются звуками экспекторации «гостей» и громкими протестами бонапартисток: eh bien, auras-tu bientôt fini? — на что следует неизбежный ответ: ах, матушка! к-ха, к-ха... хррр...» (Щ. XIV, 63) といったような状景が展開され、「ничего ее не интересует, ни книга (за исключением порнографической литературы, ни картина (за исключением...略...))» (Щ. XIV, 68) という露骨な侮蔑をしている。

以上のような女たちと同列に置かれたボナパルチストについては随所で再三言及されている。たとえば下記の如きもその一例である。

„У всякого мужчины (ежели он, впрочем, не бонапартист и не отставной русский сановник, мечтающий в виду Юнгфрау о коловратностях мира подачек) есть родина, и в этой родине есть какой-нибудь кровный интерес...» (Щ. XIV, 8)

1880年に作者はインターラーケンに数日滞在した。その空にそびえる ユングフラウ山を望み、かつて身を置いた袖の下の世界にあれこれと思いを馳せるボナパルチストの退職高級官

吏と、祖国とは断ち切り難い切実なものを持つ民衆との対置がなされている。この種の高級官吏はしばしば作中に出現し、「Граф и репортер」という寸劇（Щ. XIV, 89～95）では、Твёрдоонто 伯爵と Подхалимов との一问一答及びその前後の描写にその人物像が浮き彫りにされている。

この Твёрдоонто という珍妙な人名は、Букиазба́ という人名（Щ. XIV, 205）と同様、アルファベットのスラブ名を組み合わせたもので、作者と同じ時期にスイスとパリに滞在していたリッウェイ時代の級友、悪名高い Д. А. Толстой 伯爵をモデルにしたもので、「бюрократ до мозга костей」とか、「был создан для того, чтобы служить оружием реакции」<sup>(11)</sup>と云われた、ロシア政府の反動的政策の代表的人物、前文部大臣（1875～1880）で、他の箇所では тайный советник Петр Толстолобов, граф Пустомыслов, 或は странствующий администратор という尊称が与えられている。

探訪記者の Подхалимов はその名の示すと通りの подхалим で、「Мелочи жизни」、「Пестрые письма」等の他の作品にも登場する、資本主義的出版界の否定的特徴をそなえた無定見な記者、「Новое время」紙のパリ特派員 С. Ф. Шарапов がモデルになっている。作中では「И шило бреет」紙の記者として、「теория повсеместного смерча」<sup>(12)</sup>論者の Твёрдоонто と、はた目には滑稽な、本人同士は大まじめな対談を始めるに先立って、次のように自問自答する。まず「смерч」とは何かと尋ねられたら、それはヘブライ語でベテスダ<sup>(13)</sup>のことを指すと答えよう、更にベテスダとは何かとたまたみかけられたら、それはシロアムの聖水盤<sup>(14)</sup>と答えて、その先はやむやにしようと心の準備をする。そもそもこのような подхалимовы が鼻を突っ込んで記事の対象とするような人物が、無知な人々の間で名声が上がり、「упраздненная ретирада」や、「храм оставленный」<sup>(15)</sup>に至っては、鼻をつまんで傍を駆け抜ける敏感さを持っている。この敏感さに着目した作者自身、いまでこそ домовой が棲みついている「храм оставленный」では、つい先頃まで<sup>(16)</sup>香がくゆり、讚美歌が流れていた寺であって、時を得れば忽ちヴェスヴィアス火山となる可能性を炯眼にも予知している<sup>(17)</sup>（Щ. XIV, 87）。記者になりすました作者と伯爵との対話の蔭には作者の皮肉な苦笑がかくされている。この二人の対話を戯画化することによって、ロシアの反動的な国内政策をアイロニカルな表現で辛辣に批判しているのである。

このように、題名こそ「За рубежом」であるが、三箇月にわたって西欧諸国を訪問して得た見聞をもとに叙述しながら、片時も忘れられぬロシアの現実との比較において、ロシア的視点から評価する手法を、かつて用いた「чужой」と「свой」の対置による諷刺的效果を発展させた、「зарубежный」と「отечественный」を混合した作品の題材に適用し、そこに「русские за границей」の一典型としてボナパルチストを登場させたものと思われる。

青春時代、サン・シモンやフーリエの国、人類の信頼をになう光輝に満ちた国として、フランスに深い愛情と期待を寄せていただけに、革命的フランスへの熱狂的信頼は既に崩壊していたものの、「囑望の国」を踏みにじったボナパルチストとその一味、ひいてはロシアのボナパルチストたち、さらにその一人である Твёрдоонто 伯爵と彼が代表する一連の反動的政策に対する憎しみと怒りが、抑制された冷徹さを通した諷刺的描写の中に強く込められている。

## 2. Дыба と Удав

《За рубежом》の多彩なアレゴリーの海には、Дыба（拷問台）と Удав（うわばみ）なるグロテスクな仮名を付せられた《бесшабашные советники》も登場する。この二人は作者と同じ列車で外国へやって来た老いたる高級官吏で、Дыбаは Михаил Николаевич 伯爵<sup>(18)</sup>の学校を出て《чиновник для преступления》（犯罪取締官、刑事）に、Удавは Алексей Андреевич 伯爵<sup>(19)</sup>の学校を卒業して《чиновник для чтения в сердцах》（読心官）になっている（Щ. XIV, 12）。彼らの紋章にはそれぞれ《не пролей!》とか、《содержи в опрятности!》という象徴的な語句が書かれていて、お上の命令遂行に際して「献身的な残忍性」を発揮したおかげで、寵を得て昇進した《департаментско-курьерская аристократия》の、古い官僚制度の代表的人物だが、死後は記念碑の代りに《осиновый кол》、つまり魔女や吸血鬼を死後に地上を徘徊させないための棒杭が建てられるであろう、とスラブ俗信の表現を用いて、取締りを受ける側の人々の怨念の深さをほのめかしている。

この二人と寝台車のクペーを共にした語り手は、彼らが《киевский дядя》<sup>(20)</sup>であることを警戒して、話しかけてくる彼らにいろいろと煙幕を張る。Удавは職業意識から、語り手の心中を探ろうとして祖国愛の話題を持ち出すが、語り手の慎重で巧妙な話術のため本心を看破することが出来ない。<sup>(21)</sup>語り手が胸中ひそかに北叟笑む様を彷彿させる場面である。

なお、この対話の中にも、作者が明らかにドストエフスキーの見解をもじり揶揄していると見られる箇所がある。たとえば、ドイツでは痩せ地でも《буйные хлеба》が育っているのに、ロシアには沃野もあり《И молебны, кажется, служат, а все хлебушка нет?》と Дыба が問いかけたのに対して、《много уж очень свобод у нас развелось》と答え、《Dixi et animam levavi, или в русском переводе: сказал — и стошнило меня.》（Щ. XIV, 32）と付言している。ドストエフスキーはこの箇所に関して、《Разговор с советниками Дыбой и Удавом — верх глупости и лакейства》<sup>(22)</sup>と批評しているが、「愚の骨頂」との評言を吐いた心情は理解し得ても、《лакейство》という評言は、諷刺の切れ味を諷刺的に賞讃したのでないとするれば、作中の《стошнило меня》を不用意にか、あるいは故意に看過したからではなかろうか。同時代人であったこの二人の作家は、スラブ主義と西欧主義の皮相な相剋を超えた深刻な対立を示しており、二人の巨峰の激突はそれぞれの作品の随所で火花を散らさんばかりであったが、この問題についてはいずれ稿を改めて触れてみたい。

スイスの保養地で Дыба たちと再会してふたたび対話が始まるが、当時祖国を追われた革命的亡命者や進歩的思想家が集っていた《страна превратных толкований》だけに、Удавと Дыба の追求はやまず、話題はしばし《увенчание здания》をめぐる。例によって彼らを煙に巻きながらも、《Несомненно, что до сих пор идея «увенчания здания» ни в ком не встречала такого страстного сторонника, как во мне》（Щ. XIV, 75）と、憲法制定を痛切に願う気持を披瀝し、《каким-то двум жалким старикам выпало на долю посеять в моем сердце плевелы двоегласия!》と述べたことを見のがしてはなるまい。

このとき話題の中心となった《увенчание здания》もアレゴリーの一つで、60年代～70年代の改革の《здание》を憲法によって《увенчать》する意味から出ている。この憲法論議を通じて作者は Удав と Дыба の政治的見解を明るみに出し、ジグザグをたどる政府の国内政策路線と、専制政治の根本的特質に言及している。

語源から云っても、歴史的連想から云っても、Удав とか Дыба という諷刺的な姓を彼らに与えた作者の心底には、ツァーリの専制政治とその忠僕たちに対する深い憎悪がひそんでおり、古民謡の《гадёнок》<sup>(23)</sup> に擬しているほどである。

以上、紙面の都合でわずか二例を挙げるにとどまったが、かくも数多くのアレゴリーを用いざるを得なかったこの種の作品のジャンルについては、作者自ら次のように述べている。

„...хотя многим кажется, что писать в этом жанре сущие пустяки, но в сущности, это едва ли не самый трудный род литературы. Представьте себе, что тут надо каждое слово рассчитать, чтоб оно не представляло диссонанса, чтоб оно было именно то самое, какое следует.»<sup>(24)</sup>

作者の側からしても《самый трудный род литературы》を、読者が《диссонанс》なしに理解し得るように記述することは決して《пустяки》ではなかったし、錯雑した世界に明滅する人間の言葉と行為を暗示的に語り、解説する「語り手」又は作者の声は重旋律的記述の深さと拡がりの中で響きわたり、独特な芸術的体系を貫ぬく哲学的な歴史的社會評論は、すぐれた文学的技巧の光彩とともにその価値は未だ失なわれていない。

#### 註

- (1) 《Невозможно понять историю России во второй половине XIX века без помощи Щедрина...》，М. Горький, История русской литературы, 1939, стр. 274.
- (2) П. К. Щербальский, Критическая литература о произведениях Салтыкова-Щедрина, вып. IV, стр. 27~28.
- (3) В. Лазурский, Воспоминания о Л. Н. Толстом, М., 1911, стр. 40~41.
- (4) С. Макашин, Щедрин в иностранной литературе, Литературное наследство, М., 1934, т. 13~14, стр. 675.
- (5) А. И. Ефимов, Язык сатиры Салтыкова-Щедрина, М., Изд. Мос. ун-та, 1953, стр. 22.
- (6) より正確に云えば、第1章はスイスで書き始め、パーデン・パーデンで書き続け、パリーで完了した。第2章は全部パリーで、残りの5章は帰国後ペテルブルグで執筆し、《Отечественные записки》の1880年9~11号と、1881年の1, 2, 5, 6号に掲載された。単行本は1881年9月にペテルブルグの А. А. Краевский の印刷所から5020部出版された。
- (7) 1884年4月20日《Отечественные записки》閉鎖にあたっての声明文から。
- (8) 諺《Жить живи, однако и честь знать》。
- (9) 以下、М. Е. Салтыков-Щедрин, Собрание сочинений в 20 томах, 1965~(続刊中), М., Худ. лит. をЩ. と略記し、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で示す。
- (10) 1880年6月8日モスクワでプーシキンの銅像の除幕式が行なわれた時、ドストエフスキーの演説で用いられた言葉を揶揄したもの。このほかに《гордый человек》, 《новое слово》等もある。
- (11) Воспоминания Б. Н. Чичерина, Изд. Мос. ун-та, М., 1929, стр. 192~193.
- (12) Политика оголтелой реакции (Я. Эльсберг, Салтыков-Щедрин, стр. 456).
- (13) ヨハネ伝福音書, 第5章第2節. エルサレムのベネスダの池の水。
- (14) 同上, 第9章第7節. 註(13)と共に、いずれもキリストの言葉に従って病をいやした故事から、回復法, 治療法の意。
- (15) Лермонтов の詩《Я не люблю тебя...》から。

Так храм оставленный — все храм, / Кумир поверженный — все бог.

- (16) 同伯爵は政府の方針変更により、1880年4月解任されたばかりだった。
- (17) 作者は1880年10月、西欧からペテルブルグに帰って間もなくこの部分を書いたが、それから1年半後の1882年5月に Д. А. Толстой 伯爵は内務大臣に帰り咲いている。
- (18) リトワと白ロシアにおける1863年の暴動鎮圧に功績あって伯爵となった《絞刑吏》の異名のある М. Н. Муравьев.
- (19) А. А. Аракчеев. 最初の原稿では Петр Андреевич 伯爵となっていたもので、憲兵隊長、皇帝官房第3課長(1866~1874年)の Шувалов. «Петр IV», «Аракчеев II» と呼ばれていた。検閲を考慮して Петр を Алексей にかえた。
- (20) 俚謡《У огорода — бузина. У Києви — дядя, Я за то тебе люблю, Що у тебе перстень...》から。
- (21) 語り手の《仮面》に関する観察は Е. И. Рылик, Курсовая работа, филологический ф-т МГУ, 1953 参照。
- (22) ЦГАЛИ, Фонд Ф. М. Достоевского, опись 1, № 17, стр. 9; ЛН. т. 83, М., 1971, стр. 672.
- (23) «Отдал меня сударь-батюшка за немилого; за немилого, за старого, за гаденка».
- (24) М. Е. Салтыков-Щедрин, Полное собрание сочинений, в 20 томах, М.-Л., ГИХЛ, 1933~1941, т. 19, стр. 175.

## 参 考 文 献

1. М. Е. Салтыков-Щедрин, Собрание сочинений в 20 томах, М., Худ. лит., 1965~(続刊中).
2. Полное собрание сочинений М. Е. Салтыкова [Н. Щедрина], в 12 томах, издание пятое, С.-Петербург, Издание А. Ф. Маркса, 1905~1906.
3. Литературное наследство, т. 13~14, М., 1934.
4. Я. Эльсберг, Салтыков-Щедрин, жизнь и творчество, М., Гослитиздат, 1953.
5. В. Я. Кирпотин, Философские и эстетические взгляды Салтыкова-Щедрина, М., Гос. изд. полит. лит., 1957.
6. А. И. Ефимов, Язык сатиры Салтыкова-Щедрина, М., Изд. Мос. ун-та, 1953.
7. Салтыков-Щедрин, М. Е., «За рубежом» с предисловием С. А. Макашина, М., Худ. лит., 1973.
8. С. Борщевский, Щедрин и Достоевский, М., Худ. лит., 1956.
9. Достоевский — художник и мыслитель, сборник статей, Академия наук СССР, Институт мировой литературы, М., Худ. лит., 1972.
10. И. Т. Ищенко, Пародия Салтыкова-Щедрина, Минск, Изд. БГУ, 1973.
11. М. С. Ольминский, Щедринский словарь, М., Гослитиздат, 1937.